

ピアノ三重奏の様子



式典のオープニングでは、吉野彰さんの出身校・吹田第一中学校の卒業生であるヴァイオリニストの堀江恵太さん、チェリストの堀江牧生さん、ピアニストの三浦颯太さんによる、ブラームス作曲のピアノ三重奏曲第一番より第一楽章の演奏が行われました。

### 顕彰式



吉野彰さんに贈呈される賞状とトロフィー

今回の式典は、感染症拡大防止の観点から、吉野彰さんはリモートでの出演となりました。市長と議長からのあいさつの後、吉野彰さんがスクリーンに登場すると、客席からは大きな拍手が沸き起こりました。また、会場には名誉市民に贈呈される賞状とトロフィーを展示しました。

# 吉野彰さん

## 吹田市名誉市民顕彰式・スペシャルトーク



市は、ノーベル化学賞を受賞した吉野彰さんに、令和3年3月、吹田市名誉市民の称号を贈り、令和4年2月23日にメイシアター大ホールで式典を開催しました。  
当日は市民ら約600人が観覧。吹田市名誉市民顕彰式後のスペシャルトークでは、来場者が興味深く吉野彰さんの話に耳を傾けていました。

### 吉野彰さんプロフィール

- 昭和23年(1948年) 吹田市生まれ
- 昭和35年(1960年) 吹田市立千里第二小学校 卒業
- 昭和38年(1963年) 吹田市立第一中学校 卒業
- 昭和45年(1970年) 京都大学工学部石油化学科 卒業
- 昭和47年(1972年) 京都大学大学院工学研究科石油化学専攻修士課程 修了  
旭化成工業株式会社(現旭化成株式会社) 入社
- 平成29年(2017年) 旭化成株式会社名誉フェロー
- 令和元年(2019年) ノーベル化学賞 受賞

### 吉野彰さんからメッセージ

私の受賞にあたり、多くの市民の方々から、心温まるお祝いをいただき、お礼申し上げます。本日は、リモートという形ではございますが、こうしてみなさま方にお祝いをいただきまして、心からうれしく思っております。

私の子供のころの吹田市について、少しお話をさせていただきます。

私は終戦直後に、吹田市の千里山で生まれました。もちろん当時の千里山は現在の千里山とは全く異なっており、阪急電車の千里線の終点が現在の千里山駅でございました。私はその近くで生まれ育ったわけでございます。もちろん、現在の千里ニュータウンもございません。竹やぶだらけの環境の中で、トンボ釣りですとか、カブトムシ採り、ザリガニ釣りをしたことを今でも鮮明に覚えております。そういった少年時代を吹田市で過ごし、2019年にノーベル賞受賞という形で現在に至っております。

改めて、本日もみなさま方からお祝いいただき、ありがとうございます。

## 若いころの吉野さん



考古学研究会で遺跡の発掘に  
明け暮れた(大学生)



好奇心旺盛で、何でも自分で  
確かめないと気がすまない性分だった  
(幼少期)



丈夫な赤ん坊だった(幼少期)

# 極

## 研究者としての在り方

**市長**…科学技術を極めることが人類の役に立つこともあれば、その方向を一つ間違えると、危ないことにもなり得るといふ研究者の心構えについての考えは。  
**吉野**…サイエンスが独り歩きすると必ず負の遺産が生まれる。地球環境問題はまさにそれを象徴する世界的な問題です。研究者、技術に携わる者にとつては、単にその技術・研究だけではなく、社会全体の調和が非常に重要。特に地球環境問題は、社会システム全体の中でこの科学技術がどういう意味を持つのかを考へながら技術開発を進めていくことが非常に大事だと思います。

# 偶

## もし違う道 があったら

**市長**…小学4年生の化学との出会いもそうですが、人生は偶然の連続だと。偶然の積み重ねで今があると思えば、別の偶然があれば全く違う道もあったのでは。  
**吉野**…私、個人的には歴史が好きなんです。歴史の流れが現在に至り、この先の流れまでが何となく見えてくるのが面白い。そういう意味では私は歴史学者の道を歩んだかもしれない。

限定配信

4月1日(金)~14日(木)  
当日の様子を視聴できます



市ホームページ

## 最初で最後の ランナーズハイ

**仲野**…若かりしころの一番の思い出は。苦しい出でも。  
**吉野**…高校のマラソン大会で、一度だけランナーズハイなるものを経験しました。折り返し地点手前でギブアップ寸前。そこを我慢して走り出すと、楽になる。「苦しい壁を乗り越える」と意外と楽になる」という教訓をいただきました。  
**市長**…壁が近づいてくると、ぼう然としたり、逃げたくなったりしますが、  
**吉野**…ゴールするため、壁は当然乗り越えなさい

けない。できるだけその壁は早く来てくれた方が楽なんです。一つ壁にぶち当たって、それを乗り越えれば、それはゴールに一步近づいた証です。壁というものはポジティブにとらえるのが一番いい。

# 若

## あきらめない。 壁の乗り越え方

**仲野**…多くの人は壁に直面して挫折してしまうが、そこを乗り越えるヒントは。  
**吉野**…努力はまず、めいっばいしないといけない。しかし、どうにもこうにもならないところまで来たときに、エアポケットのような時間をつくることで、ふと何か新しい発想やひらめきが出てくる。とことんまで苦しんで緊張を吐いた瞬間に、ヒントが生まれます。そのためにもスイッチのオンオフは必要で、土日はできるだけ別のことをやっています。

吉野彰さん、仲野徹さん、後藤市長による  
スペシャルトーク

化極會偶員若  
お題の一字

とおる  
仲野徹さん

大阪大学医学部卒業後、内科医から研究の道へ。京都大学医学部講師などを経て、大阪大学大学院・生命機能研究科および医学系研究科教授。



後藤圭二(吹田市長)

吹田市役所入庁、平成26年(2014年)退職、平成27年(2015年)、吹田市長に就任。



## 負けず嫌い？

仲野：研究者には、割と負けず嫌いな先生が多い気がします。吉野さんはいかがでしょうか。

吉野：両面あると思います。関東気質と関西気質の両方あります。

市長：企業研究者として、研究テーマを途中であきらめざるをえないことがあったと思います。それを負けとするか、どう消化されたのでしょうか。

吉野：会社に入って基礎探索研究を何年か続けました。基礎探索研究は基本的

には1人で、大体2年のスパンで研究を進め、次に繋がるような芽を見いだす研究のステージです。リチウムイオン電池の研究は、実は私の4番目の研究テーマでした。つまり、1番目2番目3番目は失敗したという事なんです。大事な点は、失敗しても「これは間違っている」と実証できれば成功だということなんです。その意味で、失敗は何度も繰り返さないとけない。



企業研究者の道をスタート(入社直後)



## あきらめる決断

仲野：あきらめないという意志はすごく大事ですが、どう見てもあきらめないのだめな状況のときのあきらめる判断は意外と難しいと思います。いかがでしょうか。

吉野：本人は筋がよさそうだと思う。思わぬ場合でも周囲はそうは思わないというケースは、本人がどこまで頑張れるかでしょうね。「今は結果が表れてはいないけれども、あと2年続けたら

絶対に結果が出る」と本人に信念がある場合は、周りの摩擦があっても押し通せる。この場合は、自分の中で何か手応えがあるはず。仲野：自分を知っておかないとだめかもしれないですね。

市長：続けたい自分とそれを冷静に見る自分。とにかく一生懸命やったらいいというものではないですね。



## 大学と企業研究

進めてこられたと思います。何かとてもいい関係だったのではないかと勝手に想像しています。

吉野：ノーベル賞受賞につながったリチウムイオン電池という製品は、実はこれまでのノーベル化学賞に支えられています。1981年受賞の福井謙一先生のセオリー「フロンティア電子論」がありました。その19年後に、ポリアセチレンというプラスチックでありながら電気が流れるという素材を発見され、受賞されたのが、白川英樹先生。ここから先が産業界、企業の責任でした。ポリアセチレンという新しい素材を、どんな製品に応用し、何に使うかを研究していったことが。

仲野：真理の探究に近い基礎研究の一つの成果があり、その後、ポリアセチレンという新素材が生まれた。この辺りまでが、アカ

仲野：研究者として大学と企業の違いを感じますか。  
吉野：本来の大学の研究は、真理の探究にあり、企業の研究には技術を最終的にはマーケットに、という一連の流れがあるように目的が違います。子弟関係もありません。  
市長：研究者と言うと大学をイメージするが、大学と企業研究の両者があってこそ今の技術的発展がある。これまでも大学の研究者と連携しながら、研究を



2019年ノーベル化学賞の受賞記者会見。開発したリチウムイオン電池は、スマートフォンをはじめ電気自動車や生活の身近なところに活用されている

デミアの研究のミッションだ。その先が産業界でできない研究領域であり、この三つがうまく連動することで、基礎研究が実際の製品となって、世の中に役に立ちましたねということですね。  
市長：本日は貴重なお話をいただき、吉野さんがより身近な存在に感じられました。ありがとうございます。

### もっと聞きたい

## 「別録インタビュー」

スペシャルトーク開催にあたり事前募集した市民からの質問に、顕彰式・スペシャルトークの後に吉野彰さんが答えてくれました。



Q1 吹田市での思い出の地、お気に入りの場所はどこですか？

A 千里山駅の近くにあった関西大学のキャンパス。当時のキャンパスは、建物も非常に少なく、池やグラウンドはトンボやカブトムシ採りに格好の遊び場所でした。よく遊んだのを覚えております。昔の面影はありませんが、関西大学のキャンパスには学会で今も出向くことがあります。

Q2 悩める中学生、高校生から。受験勉強が嫌になることはありませんでしたか？

A ありませんでした。当時、家庭教師はあったかもしれませんが、塾は一切なく、自分で受験勉強をしていました。自分の将来進みたい道や職業のために、その仕事に就くにあたって、そして社会人として、物理も、歴史も勉強する。将来の自分につながっていくと考えて勉強をする。受験勉強はその途中にあるものだと考えていたからです。

Q3 これからの夢はなんですか？

A 今回のノーベル賞受賞の理由の一つ目は「リチウムイオン電池の発明が現在のモバイルIT社会の実現に大きな貢献をした」ということでした。二つ目は「リチウムイオン電池の発明がこれからサステナブル社会の実現に大きな貢献をしていくことを期待している」という未来に向けた内容でした。これから2030年、2050年にかけて実現に向かっていくサステナブル社会あるいは地球環境問題の解決が世界を大きく変えていくこととなります。このノーベル賞受賞の二つ目の理由を、私のこれまでの経験を活かして、若い人にもいろいろアドバイスしながら実現させていきたいと思っています。